



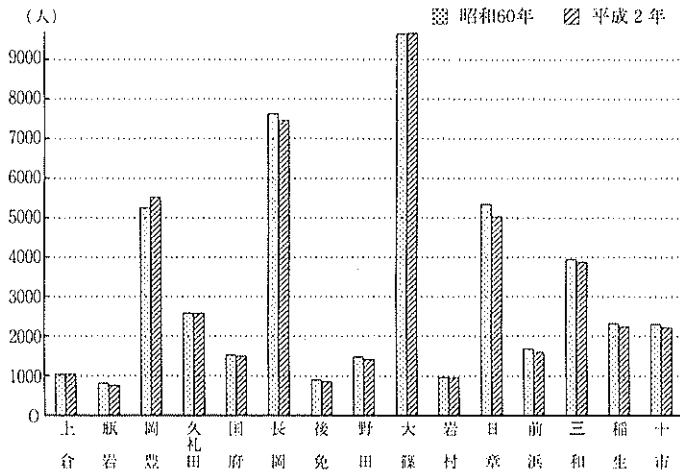
前回比727人減少

1世帯当たりの人数微減

昨年(昭和60年)の十月一日現在、皆さんの協力で実施した国勢調査の要計表による人口と世帯数がこのほど公表されました。

それによると、南国市の人口は四万六千八百二十七人(男二万二千四百三十九人、女二万四

昭和60年・平成2年地区別人口比較



千三百八十八人)で、前回の昭和六十一年の国勢調査に比べ、七百二十七人、一・五三割減少しました。一方、世帯数は一万五千二百五十世帯で、百五世帯増加。一世帯当たりの人数は三・一人となっており、単身世帯や夫婦のみの世帯が増加していることがうかがわれます。

高知県の人口は八十二万五千六十三人で、前回に比べ二万四千七百二十一人、一・七五割減少、増加は高知市や野市町など県中央部の五カ市町村にとどまりました。

同和教育シリーズ

部落はいつ、だれが、何のために

つくったのでしょうか ⑬

今回から高知県(土佐藩)の部落について、資料を基にたどってみましょう。

「部落の人たち」と言えば、社会の最下層の人々の子孫といった受け止め方をすることが多いようですが、必ずしもそうではありません。

昨年十二月十一日の高知新聞「ふるさとの先人」欄に、中村市の風辺寿太郎さんの生涯が、「解放運動の先駆者・人望厚く果敢な活動」という見出しで紹介されました。本県の部落解放運動を振り返るとき、決して忘れることのできない人物です。

治安維持法による厳しい弾圧の中で、一九二六年(大正十五年)九月、中村町の「中央座」を借り切り、中村水平社を創立、積極的な活動を行いました。その人柄には人を引き付ける魅力があり、戦後すぐ結成された部落解放委員会等が発展的に解消し、一九五五年(昭和三十年)に部落解放同盟が結成されたとき、押されて初代の委員長に就任し、多くの業績を残しました。

その家に伝わる「風辺家先祖由来記」は、旧中村町史や現中村市史にも詳しく記述されています。その一部を紹介いたします。

風辺家先祖由来記

一、私の先祖はもと伊予の深田城におりました竹林院右衛門佐実親と申す者でございます。

一、天正九年(一五八五年)、長宗我部元親に攻められ、深田城は落城し、同十三年に浪人となって落ち去り、浪名を風辺祐大夫と称し、幡多の地にやって参りました。

一、落ちのびて来る途中、一族家臣の数が多く逃げるのに都合が悪いので、北幡及び幡多の各地に散在することになりました。若君が十三歳でしたので乳母などをつれ、土佐の入野、国塚(現中村市古津賀)を転々としていたところ、そのままいれば生活に困ると

思い中村右山に住みつきました。この後、中村三万石を支配していた分家の山内家の若君が生

まれたとき、山内家の「辻売り」に会って契約親となり、以後中村山内家に入りを許されました。その後も若君が生まれたときに「お紐」を献上し、その褒美に屋敷とお切米(給与としての米)をもらったり、お礼に行ってお盆をもらい、備前勝光の刀を拝領したことなどを詳細に記した指し書が奉行所に出され、その末尾には次のように書かれています。

一、右の条々、二代中村藩主良豊様が御自筆で書かれ、御判形もおおされている通りで、少しも偽の儀申しあげておりません。

元禄三年二月二日

幡多郡中村 藤左衛門 この古文書にあるように、風辺家の先祖は城持ちの武将でしたが、浪人となり、時代の流れの中で、賤民とされ、えた身分に組み入れられたのです。

部落の人々の先祖には、このような例がほかにも数多く報告されています。

(つづく)

※辻売りⅡ町の辻に子供を捨て、まねをして、通りかかった人に拾って、契約親になつてもらうと元気に育つという風習。